

## ○ 台湾への牛肉輸出、業界の期待多く、一部は10月から輸出開始も

既報の通り、9月22日付で台湾への牛肉輸出が可能となった。沖縄・那覇～台北間で628kmと距離的な近さや宗教上の制約がないこと、食文化や親日家が多いなど様々な要因から、日本の食肉・畜産業界にとって長らく台湾への輸出再開が待たれていたところ。今回輸出認定を受けた29施設および関連企業のなかでは、10月早々にも第一便を輸出する計画があり、有望な輸出先として期待が高まっている。

スターゼンによると、10月初旬に台湾向けの第1便を予定しているという。販売先は現地のインポーターとディストリビューターを通して、焼肉店や日本食レストラン、さらに高級小売店などでの展開を予定しているという。日本産牛肉の輸出先として、台湾市場は、香港並みに拡大すると期待しているようだ。また、神戸肉流通推進協議会によると、詳細は今週末に発表する予定だが、来週中ごろに神戸牛をフルセットを空輸する予定だという。

そのほか、伊藤ハムでは、グループ会社のアンズコフーズが台湾に支社を構えており、アンズコを輸入者として仕入れる展開を予定している。アンズコ経由で現地からの発注も来ており、出そうと思えばいつでも出せる状態だが、ラベルなど輸出手続きの詳細について行政側と照会する必要があるようだ。市場の可能性については、台湾自体が小さな地域のためそれほど大きい市場とは見ていないが、親日国であり、和牛に対しての認識があると見ているようだ。

そのほか、ミートコンパニオンでは、グループのアグリス・ワン和光ミートセンター(埼玉・和光市)が認証を取得している。すでに現地量販店などの需要家を和光ミートセンターに招いて現地向け規格や価格などの商談を詰めるなど複数の商談案件を持っている。台

湾は親日家も多く、味の嗜好も日本人と似ており、東南アジア市場に比べると宗教上の制約もないため牛肉の需要は大きいとみているようだ。JA食肉かごしまでは、現時点で具体的輸出計画が固まっていないものの、輸出要綱などを精査し、なるべく早く輸出ができるようカートンBOXなどの準備を整えているところだという。

一方、台湾の牛肉市場に詳しい事情通によると、台湾では米国や豪州からも年間11万tもの牛肉を輸入しており、いわゆる高級和牛については、豪州産WAGYUなどが台湾の牛肉市場に大分先行しており、厳しい競合が予想されるという。また、米国向け牛肉輸出がことし1～6月累計で低関税輸入枠の200tを超えていることもあり、なおさら台湾市場への期待値が高まっているものの、来年1月1日から米国の輸入枠がリセットされるため、来年以降の台湾向け輸出については未知数な部分も多いとみる向きもある。また、現地資本の需要家サイドと商談を進めている別の事業者によると、取引先から発注書をもって、回収リスクの懸念から前金払いで対応する考えのようだ。

別の事情筋は本紙の取材に対して「開きそうでなかなか開かなかったが、最後は早かった。29施設の認定は予想より多かった。台湾のマーケットを考えると、人口、所得水準、観光客を勘案すれば年間300t前後ではないか。香港の半分だが、香港は中国に流れる部分もあるといわれ、そうすると香港のいわゆる実需部分と同じ水準ではないか。ただ、香港の場合、ディナーは1万円が相場だが、台湾ではそこまで高くない。そうすると和牛だけではなく、部位や交雑の活用なども考えることが必要か」とみている。

## ○ 「第1回“日本の食品”輸出EXPO」が10月に幕張メッセで開催

リードエグジビションジャパンはJETROと共催し10月11～13日、千葉市美浜区の幕張メッセで「第1回“日本の食品”輸出EXPO」を開催する。食品輸出を推進するための展示会であり、農水省も協力している。同展示会では、4,000人の海外からの来場者を予定し、1,000人が招待バイヤーとして来場する。招待対象は、海外の輸入商、卸商、大手スーパー、飲食店の代表や購買マネージャーで、66カ国地域に及ぶ。出展は約300社を予定、農水産物を始め、調味料、食品素材(小麦粉など)、ドリンク、菓子、加工食品など様々で、輸出コンサルティングや総合物流サービスなども含む。食肉では、スターゼンインターナショナルや伊藤ハムらも出展する。